

## はじめに

ずっと。ずっと重くのしかかっている。なぜ自分には恋人がいなかったのか。恋愛をしたい。セックスをしたい。恋人が欲しい。何気ない会話を女性としてみたい。それができない自分は、どこかに欠陥があるんじゃないか。人間として十分な基準を満たしていないんじゃないか。街を歩くカップルの姿が、マッチングアプリの広告がはるか遠くにある。それどころか、ここにたどり着けないお前は劣っているのだと、突き付ける脅しにさえ見える。焦りだけが募っている。もう、恋人をつくることでしか、自分の価値は証明できないのではないかと思う。

モテたい……。それを周りに言っていると、「そんながつついてるからお前はモテないんだ」などと言われる。しかも困ったことに、実際に女性と関わる機会があったとしてもうまく身体が動かない。どこからともなくいくつものまなざしが自分の身体を貫いて、ガチガチに固まってしまふ。つばをうまく呑み込めない。普段当たり前に行っている呼吸さえもうまく

くできない。それを振り払うかのように、慣れない言葉を口から吐き出したり、無理に行動を起こしたりする。その言動を相手はどう思うか、相手にどういう影響を与えるかを想像する思考はすでにストップしていて、コントロールから離れてどうしようもない。その結果、多くの場合、相手は自分から離れていってしまふ。時に明確な拒否を示されることさえある。あれだけ、あれだけ懸命に振り絞ったのに。それなのに。圧倒的な挫折感が心を包んで、それでまた、「自分は劣っている」というイメージだけが突き付けられていく……。

\*

一九九〇年代後半から「非モテ」という言葉がインターネットを賑わせてきた。この言葉は多くの男性を巻き込み、恋人がいない、女性から好意を向けられないといった苦悩が数多く発信されてきた。現在に至るまで「非モテ」という問題は多くの男たちをとらえて離さない。その力はあまりに強く、恋人ができないことに一部の男性は絶望と言っている。その苦悩を抱いている。異性愛男性が女性と付き合いたいと思うのは普通のこと、そ

れができないことに苦悩を抱くのは当然だ、という意見もあるかもしれない。しかし、そんな単純な説明ができないほど、「非モテ」男性の苦悩は根深い。

この本は「非モテ男性はなぜモテないのか」の原因を解明するものではないし、またこの本を読めばモテるようになるということもない。「モテにこだわっているから苦しいんだ」などと啓蒙するわけでもないし、また読めば煩惱がなくなるということもおそらくない。ではなくて、一部の男性が「非モテ」という苦悩を抱くまでの過程や、苦悩の内実を描く内容になっている。

また書き進めるにあたって、筆者が参加している「ぼくらの非モテ研究会」（以下、非モテ研）というグループの実践を参照する。非モテ研は主に男性を対象とした語り合いグループで、私を含め、参加者たちは自身の経験を振り返りながら「非モテ」の苦悩について探求している。

そこで語られるのはモテない悩みや、より良いアプローチのあり方に留まら<sup>とど</sup>ない。クラスでいじめられた被害経験、友人のいない孤独、親からの過干渉、表には出せない欲望、そしてストーキングなどの加害経験といった、あらゆる語りが「非モテ」というテーマを

介して引き出される。

こうした研究会の実践を通して、私はある疑問を抱くようになった。それは、本当に「非モテ」男性はモテないから、苦しいのだろうか？ というものである。「非モテ」男性たちが苦悩を抱き、また女性に執着するようになるには、もっと複雑な背景があるのではないだろうか。

本書では非モテ研に参加するメンバーそれぞれの体験や発見、学術的な知見、特にジェンダー研究を参考にしながらこの問いについて探求する。また「非モテ」をキーワードにさまざまな苦悩を抱える男性たちの体験世界を明らかにするという点において、ここで書かれている内容は男性学 (studies on men & masculinities) としても位置づけられるだろう。同じ苦悩を共有する男性グループをフィールドとした臨場の男性学である。

本書の構成を確認しておきたい。第一章では、ネット上の言説も含めこれまで展開されてきた「非モテ」論を追い、その限界と本書の目的を示した。第二章では本研究のフィールドである非モテ研のグループ構造について解説している。本研究の本筋にあたる「非モ

「テ」男性の生活経験は第三章から第五章にかけて提示した。第三章では「非モテ」男性が自己否定的な感情を抱いている実情と、その背景にある男性同士の競争的な関係性について、また第四章では男性たちの女性への執着や加害と、その行動に影響を与える社会構造や社会言説について分析している。第五章では、男性を追い込んでいく共同性とそこから抜け出す実践について考察した。第六章でここまでの議論を総括し、社会的な考察を加え、「非モテ」問題の核心と考えられる「男性集団内の周縁化作用」という概念を示した。また第七章では非モテ研を一つの実践論として読み解き、グループに参加する男性たちの変化にも焦点を当てた。補足的な内容として、本研究における私の立場と男性学における研究姿勢のあり方について、終章で考察を試みた。

また、本書では「非モテ」問題を男性に限定して論じている。もちろん「非モテ」は女性にも深く関わる問題であり、女性の「非モテ」について言及されている論考もある。しかし、「非モテ」はジェンダーアイデンティティによって意識や体験のされ方は大きく異なる予想されるため、本研究ではあえて男性にその対象を限定することで、男性の体験する「非モテ」を解明する。

後述するように、「非モテ」という現象は男性性をめぐる複雑な問題体系の結果として生じるものであり、ヘテロセクシユアル（異性愛）・シスジェンダー（性自認と出生時に割り当てられた性が一致している）でない男性たちの経験にも関連する。実際、非モテ研には同性愛男性やトランスジェンダーの男性（FtM）、さらにはアセクシユアル（性愛の対象となる性別のない人）の男性も参加している。参加男性たちの経験を追った第三、第五章で言うと、第三、第五章で彼らを含む多くの男性たちに共通する経験が描かれている。一方、男性の執着や加害行動を描いた第四章では、その経験を語るのが異性愛男性に多いという理由から、異性愛男性の体験を中心とした描写になっている。結果的に偏りのある記述になったことをお許しいただきたい。

以上、本書は「非モテ」男性の生活経験を分析し、学問的に理論化することを主眼にしている。非モテ研メンバーの個々の体験や男性語り合いグループの実践方法などに関心のある方は、ほくらの非モテ研究会編著『モテないけど生きてます』を参照されたい。

また、本書で記述する「非モテ」研究は、非モテ研のメンバーとともに進めたものではないが、本書の文責は西井個人にある。